

佳作

誰かのためにできること

神奈川県横浜共立学園中学校二年 小川 由莉香

「綺麗な髪だね、頑張ったね！ではまず乾いた状態で少しづつ束ねていくね。」

美容師さんはニコニコしながら手際よく私の髪を少しづつ束ねていく。今日は二年ほど伸ばした髪をヘアドネーションに提供する日だ。ヘアドネーションは二回目、手順は覚えてはいるけれど、切るときはやはり胸がドキドキする。

私がヘアドネーションの事を知ったのは小学生の時、購読していた『こども新聞』に掲載されていた記事からだ。こんな風に誰かの役に立つことができる事、そして、寄付する先は私と同じような年の子ども達であること、そこには私の知らない世界の私の知らない情報があった。もしかすると、これならば私でもできるのかな…と思った。

私は幼い頃、大きな病気にかかったそうだった。ただ、

それは、まだ生後間もない頃のことです。その後定期健診で病院に通っていたことも全く記憶になく、母から聞いた話でしか知らない。

病状の回復しない私は、ある日、輸血を行うことが決まり、病院に宿泊しながらの付き添いと私の病状に疲れ切った状態の母はぼんやりしながら手順を眺めていたそうだった。しかし、私の腕に刺された針の先の先の血液パックを見た時に、その力強い赤さに突然勇気をもたらしたという。見ず知らずの誰かが応援してくれているような、そんな言葉にならなかったという。

私は、この話を聞いたとき、髪を寄付してよかったと思った。私は献血によってその血液を寄付した人に健康と今の幸せな生活を与えてもらったのだから、私が寄付した髪によって見知らぬ誰かに笑顔を与えられたのかもしれないと思ったからだ。私は献血することはできない。それでも、ヘアドネーションという形で、誰かの心を健康にすることができる。私がああの記事に興味を持った理由は「自分にも可能なこと」。そして、「誰かに思いを伝えること」が胸の中にあるからと気が付いた。

切った髪は以前は美容院から直接ヘアドネーション

の団体に送付してくれていたが、少し前から自分自身で送付するようにならなっていた。その代わりに団体のデジタル受領証を発行してくれるので実感も湧くようになった。

「はい、仕上がりました。少し伸びてきたら今度は綺麗に揃えて好きな髪型にしてあげるから、また来てね。」

三十センチほど切ったので、鏡の中の自分はかなり印象が変わっている。髪も心も軽くなったような気持ちになった。

このような機会をつくってくださったヘアドネーション団体の方、そして、面倒なカットの方法や、ヘアスタイルの相談に乗ってくださる美容師の方、毎晩、長くて乾きづらい髪にドライヤーをかけてくれた母、そして、私を救ってくれた誰か、私の気持ちを受けとった誰か。すべての人に感謝を伝えたい。